心の輪を広げる体験作文　中学生部門　◆佳作

「認知症患者が快くすごすために」

神奈川県立相模原中等教育学校　二年　臼井（うすい）　優奈（ゆな）

先日、友達の家に行って認知症のおばあちゃんを見た。友達曰く物を勝手にどこかへ持って行ったり、夜に一人で家の周りを歩き回ったりするそうだ。大変だなとは思いつつ家族のおばあちゃんへの言い方が少しキツくて気になった。そこで、認知症への正しい対応、見てる側も嫌にならない接し方について調べて考えたいと思った。

認知症とは、一度でも正常に働いた脳の機能が何らかの原因により低下し、日常生活に支障をきたす状態のこと。六十五歳以上の五・四人に一人がなっており、高齢化が進む日本ではＯＥＣＤ諸国において最も認知症患者率が多いとされている。今後、身近な人が認知症になる可能性は低くないといえる。

次は対応について調べてみた。認知症患者は何度も同じことを言ったり行ったりする為介護者はどうしてもムカついてしまうことがあるという。きっと友達の家族もそうだったのだろう。ただ、認知症患者には「怒ること」と「責めること」はしてはいけないそうだ。例えば物をなくしたと思い込んでいたら一緒に探すふりをして

渡してあげてしまう場所を決めてあげる。多少の演技も必要なのだ。

認知症患者へは彼らの言い分を受け入れた上で、怒るのではなく事実を伝え、責めたりはせず、少しばかりの演技も入れ彼らが納得できる対応をとることが大切だ。又、見てる側も嫌にならない接し方としては、2つ考えた。一つ目は相手に対してキツい言葉を使わないということだ。どうしても主観的なものになってしまうが、認知症患者に限らず言葉遣いを気をつけることは当たり前だ。例えば既に食べたご飯を食べてないと言ったとする「覚えてないの、食べたじゃん」というのではなく、「さっき食べたでしょ、おなか空いちゃった」など相手に寄り添ってあげるような表現を日々意識できるとよいと思った。二つ目は命令しないことだ。悪い事をした記憶がないのに勝手に怒って命令されても彼らは納得できないはずだ。認知症患者だからといって特別な扱いはせず、彼らも同じ人間の一人として思いやりのある言葉遣いができるとよいと思った。

私たちが今後認知症と無関係に生きられる可能性は少ないと言える。だからこそ認知症という病気をもっと身近に感じ、正しい対応を知っておく必要があると思った。又、身近な人が認知症になった際は先述したような相手に嫌な思いをさせない言葉遣いでふれ合っていくことが大切だと思った。

今回認知症について調べたことで、認知症への興味が湧いた為、
今後も認知症について調べてみたいと思った。